



ジェームズ・T・ユーラク著 『宗達』「序文」より

京都は9世紀初頭から都として栄えたが、戦国時代の約150年間にわたる激しい戦乱のなかで荒廃し、ようやく16世紀末に復興へと向かった。戦国大名が群雄割拠した時代が終焉に向かい、1582年から1615年にかけて、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という3人の覇者のもとで天下統一への歩みが進められたのだ。

そうしたなか、京都の復興を称え、その街並みを上空から見下ろすように描く《洛中洛外図屏風》が制作されるようになった。実際の景観に即しつつも理想化した描写が特徴で、絵師たちは、依頼主の意向に沿って、建物の規模や配置を調整したと考えられる。当時の京都の街並みをおおむね忠実に今に伝えており、壮大な寺社や城郭が目を引き、それ以上に印象深いのは、細かく描き出された商店の店先や、時折のぞき見える店内の様子だ。商人たちの活気が生き生きと伝わってくる。

(中略)

扇は美しく実用的だが、かつてはそれ以上の意味を持っていた。さりげなく想いを伝える贈り物として使われることもあれば、自分の社会的地位を示すために所持することもあった。絵あるいは書、もしくは両方を施した扇も作られた。帯に差し込んだり、袖に忍ばせたりして携帯し、開いたり閉じたりして使う。扇の扱いで心情を示すこともできる。軽やかで洗練された社交の小道具だったのである。

また、扇にまつわる多様な伝説も相まって、儂く移ろう美や言葉に尽くせぬ情感といった重層的なイメージが形成され、厳格な身分社会の中で豊かで深遠な存在となった。俵屋宗達は工房を率いて、そうした表現性の高い扇を制作し、大人気となった。扇の制作を通して独自の芸術性を極めたのである。

扇は折れ曲がった面からなるため、優れた構図を作るのが難しい。宗達一門は、戦乱や恋愛、

寺院の縁起などの古典文学や伝説を描いた古画から多くの図像を引用し、洗練された扇絵を描いた。これまで世に知られてこなかった美しい図像を、京都の街なかへと送り出したのだ。

Ulak, James T. Excerpt from "Introduction." In *Sōtatsu*, edited by Yukio Lippit and James T. Ulak, 11. Washington, D.C.: Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, 2015. (ジェームズ・T・ユーラク著 「序文」 ユキオ・リビット、ジェームズ・T・ユーラク編 『宗達』p.11 アーサー・M・サックラー・ギャラリー スミソニアン協会 2015年)



俵屋宗達 《扇面散図屏風》(部分) 国立アジア美術館 フリーア・ギャラリー